



第6号

2008.2.8 発行
大阪府立北野高等学校図書館

毎日寒い日が続きますが、みなさん風邪などひいていませんか？今月は文芸祭、断郊と行事が続き、学年末考査が終われば待ちに待った春休みです！この1年間、あっという間だったな～と感じている人！年をとるごとに時の流れは早く感じますよ（しみじみ・・・）。それならばこの春休み、新しい学年への階段を上る前にちょっと休憩してみませんか？春休みの長期貸し出しは2月18日（月）から始まります（一人10冊まで）。是非図書館に足を運んで、今の自分の気持ちにぴったりの1冊を（2冊でも3冊でも！）見つけてくださいね。今月の特集は、『春休みにおすすめの本』です！



『騙される脳』 米山 公啓 (扶桑社)

昨年の平成19年を表す漢字は「偽」だそうです。最近、大して実力がなく芸に深みのないエンターテナーがもてはやされたり、本当に美味しいかどうかわからないラーメン店に大行列ができたりと、まったくオッパッピーな世の中になってしまいました。この本はそうした珍現象の真相を脳科学の観点から分析しています。現代社会の抱えている問題点が浮き彫りにされ、大変興味深い。まえがきより

「自分の決定は自分でしていると思うでしょう。しかし、実は誰かに影響されているのです。」

『内臓感覚』 福士 審 (NHK ブックス) 491-F12-1

過敏性腸症候群と「脳腸相関」の研究に長年取り組んでこられた東北大学の福士教授が、脳と腸の不思議な関係について解明しています。やや専門的な内容の本ですが、一時ブームになった「脳」に関する本にはまった人には、視点を変える意味においていい本だと思います。とりわけ、騙されがちな「脳」で日常生活を真面目におくってきたつもりの人には、如何に身体や心のことが理解できていなかったかが分かるでしょう。つまり人間そのものの理解ができていないということです。

「進化から見ても、腸こそ動物の最初の器官である。・・・ 腸の神経が脳に似ているのではない。腸の神経に脳が似ているのだ。・・・」 本文より



『海原純子の「元気な私」になれる本』 海原 純子 (三笠書房)

毎日懸命に頑張っているあなた。でも思い通りにいかなくて、落ち込んでいるあなた。ス

トレスで押し潰されそうになっているあなた。・・・そんなあなたに読んでほしい本です。
著者は心療内科の医師。

『にんげんだもの』 相田 みつを (文化出版局)

「つまづいたって／いいじゃ／ないか／にんげんだ／もの」など、さり気なく語られる、それでいてこちらの心にじんわりとしみ込んでくる言葉の数々、そしてその書。

読めば読むほど、観れば観るほど、自分が、そして、人間そのものがいとしくなっていく本です。



少し英語を深く知りたい人、易しめの英語で書かれたものを読んでみたい人に、「参考書」や「問題集」とは違う本を紹介。ただし難しすぎず、高校英語や大学入試にも役立つものを。

◇ Reading のために

『洋販ラダーシリーズ』 (IBC パブリッシング)

英語の読み物で、5段階のレベルに分かれ、各レベルに様々なテーマ・トピックがある。

・レベル4・・・2000語、TOEIC 470点未満、英検準2級以上

「くまのプーさん」「坊っちゃん」「にほんのしぐさ70」などに加え、「センター英語の長文を読もう2006-2002」がある。センターテストの実問の一部を、語数と目安時間、語彙付きで載せてある。

・レベル5・・・TOEIC 470点以上、英検2級以上

「日本の経済」「日本の金融市場」といった硬派なものや、ベストセラーの「バカの壁」もある。「地球温暖化」はその歴史から京都議定書までわかりやすい英語で読める。

『*American Pie*』 Kay Hetherly 著 (NHK出版) 837-H5-1

『*Bites of Britain, Tastes of Japan*』 Dominic Cheetam 著 (NHK出版) 837-C2-1

まだまだ洋書には手が出ないという人にもお薦めのエッセイ集。それぞれアメリカ、イギリスと日本の日常生活の違いを浮き彫りにして興味深い。前者はNHKラジオ英会話の連載、後者はラジオ英会話上級とラジオビジネス英会話の連載。本校の図書館にも入っている。

前述の洋販ラダーシリーズだけでなく、日本の著作物はいろいろ英語に訳されている。二つだけ紹介しよう。これらはいずれも日本語と英語が見開きで読める。

『21世紀に生きる君たちへ』 司馬 遼太郎 ロバート・ミンツァー訳 (朝日出版社)

日本語では小学生に向けて書かれたもの。少ない量で中身のある英文。

『国家の品格』 藤原 正彦 ジャイルズ・マレー訳 (ニッポン対訳双書)

神戸大学の入試や、本校の校内模試でも英作に登場したベストセラー。

本屋に行けば日本のコミックの英訳も多い。中身を知っているものを英語で読むのも良い。

◇ 文法・語法・単語学習のために

『謎解きの英文法 冠詞と名詞』 久野 暲、高見 健一（くろしお出版）

わかりやすくて奥深い。第2章の the の説明は明快で秀逸。この謎解きシリーズは他にもあるが、1・2年生にはこれがちょうどよい。

『英文法のカラクリがわかる』 佐久間 治（研究社）

英文法をひとつおりの学習し、基本事項が身についたら、さらに深く知るのにお薦めの本。発展的な内容もあるが、記述が平易で、目からウロコが落ちるところが多いはず。

佐久間治には、わかりやすく書かれた著書が多い。英語関係の書物が無数にある中で、信頼のおける著者の一人。3年生や大学生にもお薦め。例えば、『英語の不思議再発見』830-S2-1 『英語に強くなる多義語 200』 『英単語スプリング攻略法』（以上ちくま新書）、『英語の語源のはなし』 832-S2-1（研究社）など。

『「学校英語」ではわからない英語の常識』 松永 大介（講談社+α文庫）

学校英語ではわからない、と言われるとつい気になってしまう・・・。

『知っている単語がどんどん増える スーパー英単語分類帳』

石戸谷 滋、真鍋 照雄（黎明書房）

ある程度単語を覚えてから読むほど、意外な単語の成り立ちとつながりに驚くだろう。ふつうよく手にしている単語集とは、ひと味違う世界が開ける。



『名画を見る眼』『続 名画を見る眼』 高階秀爾（岩波新書）720-T3-1／720-T3-2b

正直にいうと私自身芸術的な人間ではない。絵に関してはすべて「好きか、嫌い」で判断する人間である。昔、居間に飾る絵を探した時も、とことん画廊めぐりをした。終に場末の店で好きな絵にめぐり合うことができ、月賦で購入した。若い（多分）無名の女流画家のシルクスクリーンである。私にとって好きな絵とは心が和む絵である。だから、世界史の教科書に出てくるような重厚な、あるいは大げさな絵画はあまり好きではない。絵や器（うつわ）なんて、高かろうが安かろうが、「好きなものは好き、嫌いなものは嫌い」でいいと思っている。だが、推理小説に関しては直感ではなく、読み終わった時、「なるほどそうだったのか」と舌を巻くような作品でなければつまらない。ここで紹介した本は世に知られた名画中の名画を探偵の如くその構成、画中に描かれている事物が暗示する事柄、時には絵画に施されたトリックをも解明してくれる優れもの。読みすすむうちに名画をみていることを忘れ、まるで謎解きをするコナンかホームズのような気分になってくるから不思議である。「謎の微笑」で有名なモナリザは出てこないが、彼女を有名にした「謎の微笑」に関する記述も大変興味ぶかい。また、歴史的背景に触れられているのも、一層絵画に関する推理(?)を

助けてくれてありがたい。

昨今、日本でもこの本にもある絵画が鳴り物入りで展示されることがあるが、そんな時には「とにかく見る」だけでなく、この本を手にとってから、細部を検証してみると、絵画の魅力が増してくること間違いなしである。



『平安妖異伝』・『道長の冒険』 平岩 弓枝（新潮文庫）

春休みに読むには、小さなものですが、何よりもいいのは、本当にリラックスして読める点です。

主人公は藤原道長。藤原道長というと、古典や日本史の授業をとおして得た、当時権勢を極めた人物という印象しかなく、決して親しみを覚える人ではありません。去年、藤原道長展があったので見てきましたが、その印象はぬぐえませんでした。

でも、ここに登場する道長は、もう結婚しているから少年とは言えませんが、まだ少年の気象の残る、潑刺とした好青年です。この道長が、父兼家の邸宅で催された宴で奏された雅楽の楽人、秦真比呂（はたのまひろ）と親しくなり、彼に助けられながら京で起こる怪異を解決してゆくという、短編集です。

道長が「怪異」に縁があるというのは、まんざら作者の創作というわけでもなく、『宇治拾遺物語』では自分に災いをもたらそうとする怪異を安倍晴明に解明させたり、『大鏡』では「道長の剛胆」が伝えられたりと、根拠があります。それを作者はうまく利用したのでしょう。どの話もおもしろく作られています。特にうれしいのは、古典の授業に出てくる、あの有名な、甥の伊周との弓争いが、さりげなく語られていますし、伊周はこの弓争いに敗れたのが忘れられないのか、『道長の冒険』では、解決しない京の怪異に、「妖異ならば叔父上のお出ましですな。なにしろ、陰陽師顔まけの底力をお持ちのようだから…」と、伊周にいやみを言わせて、さりげなく「道長の剛胆」を持ち出すというサービスもしてくれています。結構、作者も楽しんで書いているようです。

少し異色なのは、作者が神職の家に生まれたので、雅楽にとっても詳しいのです。それは楽人秦真比呂を通して紹介されますが、どれも一度聴いてみたいと思わせます。それで、CDを探しに行ったのですが、どこにもありません。まあ…、売れませんわな。

それから、彼はどんな和楽器も巧みに演奏してしまうのです。私もその中で箏（ひちりき）というのを吹いてみたくなり、学校の帰りに京都の（私、京都の住人です）民族楽器屋さんを訪ねたら、たまたまそこに在庫があったものですから、大胆にも手に入れてしまいました。ところが篠笛やケーナなどの経験ぐらいでは、音は出しても音階にならないのです。とてもあの東儀さんのように、胸ポケットからサッと出して簡単に吹いてみせるなどというわけにはいきません。よく練習してから紹介すればいいのに、古典の授業で箏の名人の話があったので、お調子乗りの悪いクセがムラムラと頭をもたげて、「箏ってこんなのよ」とやってしまって、生徒の皆さんのお耳を汚してしまいました。そうなるのがわかっているのに、止められないビョーキ持ちです。

こんな、読む者の気分を高揚させてくれる、いい本です。ぜひどうぞ。